

一般的信頼は何を測定しているのか？

—潜在クラス分析によるアプローチ—

立教大学 金澤悠介

1. 目的

ソーシャル・キャピタル論における理論的重要性にもかかわらず、一般的信頼をテーマにした実証研究で得られる知見は必ずしも一貫したものではない。たしかに、マクロレベルで見れば、国レベルの一般的信頼の水準は経済発展・民主主義の度合いと強い関連があり、その知見も一貫している (e.g. Putnam 1993; Knack and Keefer 1997)。しかし、ミクロレベルでみた場合、そこで得られる知見は必ずしも一貫しない。個人のネットワーク上の位置を独立変数にして一般的信頼の水準を説明する場合、相反する知見が得られることが多い (Horiuchi, Kanazawa, Suzuki, Takikawa 2013)。また、個人の一般的信頼の水準と組織加入の関係も相反する知見が得られている (Nannestad 2008)。

本研究は、ミクロレベルでの知見の非一貫性の一因が一般的信頼の測定に由来すると考える。すなわち、個人の一般的信頼の水準は「ほとんどの人は信頼できる」という質問で測定されることが多いのだが、この質問文の回答の中に異なるタイプの信頼が混在しているために、一貫しない知見が得られるのだ、と本研究は考えるのである。

そこで、本研究は「ほとんどの人は信頼できる」という質問の意味内容を解明することを目指す。特に、近隣住民に対する信頼・社会参加・団体参加との関係を念頭に置きながら、一般的信頼についての質問の意味内容の異質性を解明することを目指す。

2. 方法

本研究は 2012 年に実施された『地域の絆と健康に関する調査』をデータとしてもちいた。この調査は関東甲信越地方から 50 自治体が無作為に抽出し、40～79 歳の男女を対象に各自治体から 60 名ずつ系統抽出した。有効回収率は 49.6%であった。このデータをもちいて、一般的信頼・近隣住民への信頼・社会参加（近所の清掃活動・ごみ出しの監視・ボランティア活動への参加）・団体参加（地縁団体・趣味の会・ボランティア組織・業界団体）を対象に潜在クラス分析を行い、回答者にとっての一般的信頼の意味内容の異質性を明らかにした。加えて、潜在クラス分析により抽出されたグループと社会的属性の関係を分析した。

3. 結果

潜在クラス分析の結果、次の 4 つのグループが抽出された。(1) ソーシャル・キャピタル的信頼者（回答者に占める割合 27.6%）：一般的信頼・近隣住民への信頼の水準は高く、社会参加・団体参加も活発である。村部に長く居住する 60 代以上のものが多い。(2) 楽観主義的信頼者 (31.3%)：一般的信頼・近隣住民への信頼の水準は高いが、社会参加・団体参加は活発ではない。市部に居住する低学歴・低収入者に多い。(3) 地域主義的信頼者 (19.6%)：一般的信頼の水準はあまり高くないが、近隣住民に対する信頼は高い。また、近隣に関係する社会参加・団体参加が活発である。町部に居住する高収入の 40 代に多い。(4) 不信頼者 (21.4%)：一般的信頼・近隣住民への信頼の水準が低く、社会参加・団体参加も不活発である。社会的に孤立しているものが多い。

4. 結論

分析結果が示すように、一般的信頼の質問への回答には 4 種類の意味内容が異なる信頼が混在している。また、信頼の各タイプに影響をあたえる要因も異なっている。このような状況であるので、一般的信頼をもちいたミクロ的分析についての知見は一貫しないものになっているのかもしれない。